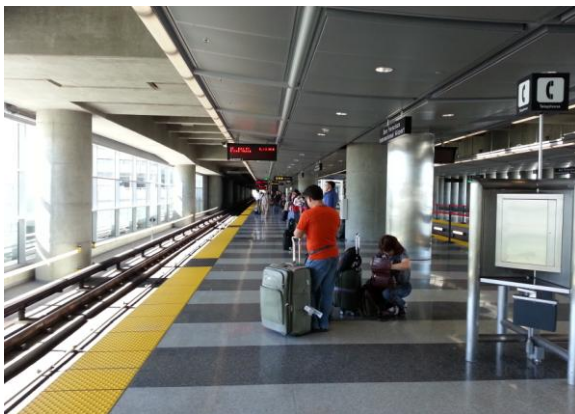


《IFTA サンフランシスコ大会感想文》

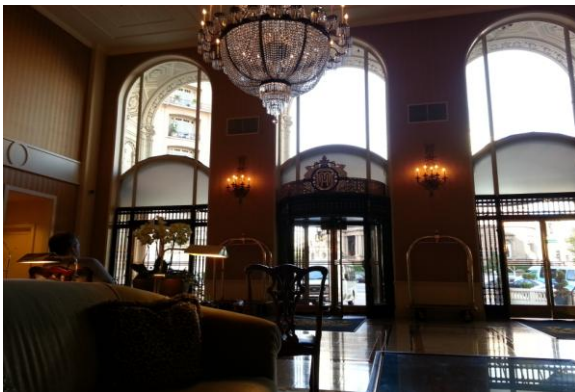
講演部・国際企画部長
東野 幸利

2013年のIFTA(国際テクニカルアナリスト連盟)大会は、10月9日～11日にサンフランシスコにあるThe InterContinental Mark Hopkins ホテルで開催されました。サンフランシスコを代表する1926年開業の老舗高級ホテルです。空港から直結しているBARTという鉄道のモンゴメリー駅、パウエル駅から20分程度のところにあります。チャイナタウンが近く、ユニオンスクエアへは徒歩15分程度。ケーブルカーの待ち時間を考慮すれば、徒歩の方が便利(下りだけ)? 丘の上に立地しているホテルだけあり、部屋から見える景色はとても素晴らしいです。



1988年に東京で始まったIFTA大会は今回で26回目。毎年どこかの都市で開催され、3日間のケースがほとんどですが、今回は10月8日のプレ・コンファレンス、10月12日のポスト・コンファレンスを含めると計5日間の長丁場。最後の5日目は出席できませんでしたが、これまで参加した大会では最長の滞在期間となりました。

また、サンフランシスコは私にとって初めての場所でした。今回は2015年の東京大会準備のため、視察の感覚で臨みました。その一環で行ったのが、現地からの時差ありの実況中継。自分の中では実験的にやってみようと、現地に行くまえから計画していました。現地から報告の意味をこめて、毎日ショートコメント付きの写真や動画を東京の事務局に送り、NTAAのフェイスブックにアップして頂きました。事務局の新島さん、北原さんには大変感謝しています。



海外へ出向くときはハプニングがつきものです。そのハプニングに最初に遭遇したのが、街中を通る心臓破りの坂。サンフランシスコの街中の坂は予想以上に傾斜がキツイ。ウィキペディアで「坂」と検索すると、サンフランシスコのメイスン通りの写真が出てくるほど坂で有名な場所です。アルコールが体内に入ると、途中で休憩しないと上りきれないぐらいの傾斜です。坂の上にそびえ立つ大会ホテルまで重いスーツケースを運びきり(下の写真の中にみえる坂の上にホテルがあります)、汗だくでチェックインした思い出や、挙げ句の果てにはホテルのルームキーを日本に持ち帰るなど、最後までハプニングの連続。ある意味、記憶に残る大会でした。



世界各国からテクニカル分析の実践家・研究者らが集い、セッションやランチタイムなどを通じて投資・分析手法などの意見交換やネットワークを広げることができます。大会参加費は決して安くはないですが、楽しく有意義な時間を過ごすことができます。

アメリカでの開催ということもあってか、約 200 人の参加者で会場は満杯。史上 5 番目に多い大会となったようです。2012 年のシンガポール大会は約 140 人でした。

参加者の内訳の属性では、大手の資産運用会社、ヘッジファンド、プライベート・バンク、政府系ファンド (SWF)、機関投資家のファンド・マネージャー、トレーダー、アナリスト、個人トレーダー、証券会社・銀行関係者、大学等の教育関係者、金融ソフトウェア関係などさまざま。特徴的だったのはサンフランシスコのゴールデン・ゲート大学の非常勤教授であるローマン・ボゴマゾフ氏 (サンフランシスコ・テクニカルアナリスト協会) が大会責任者を務めていたこともあり、大学等の教育関係者が多かったこと。日本からも鈴木さん (茨城大学工学部 知能システム工学科 准教授) がスピーカーで参加しました。

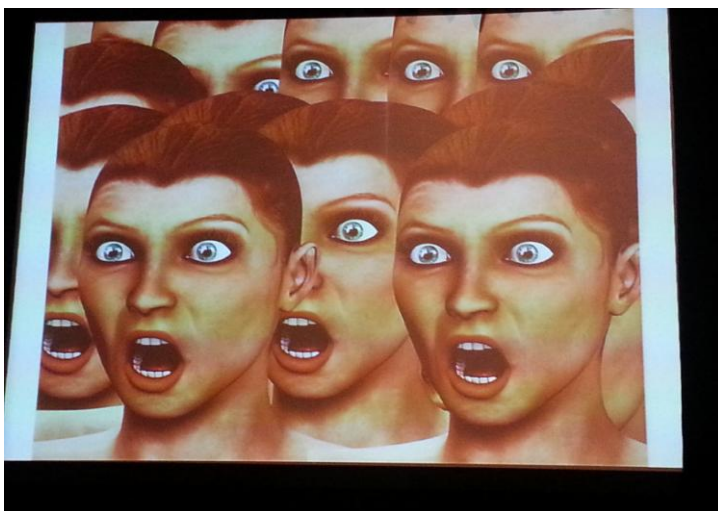


スピーカーの全体の内容も充実していました。Ichimoku Chart(一目均衡表)も所々に出てきました、以前の大会でよく耳にした"Conversion-Line、Base-Line"を、"Tenkan-Sen、Kijun-Sen"と表現していたアナリストが印象的でした。Jack D. Schwager 氏、Martin J. Pring 氏、Ralph Acampora 氏など、業界の錚々たる有名テクニシャンが参加され、近年にはない盛り上がりでした。

大会は恒例の“WALK ABOUT”、独創的な話しが聴ける 3 日間のセッションはもちろんですが、日本人参加者にとって、今回の大会はプライオリティーの高いものでした。年間で最も素晴らしいテクニカル分析上の研究論文に与えられる「ジョン・ブルークス賞」に、酒井さん(岐阜信用金庫)が唯一選ばれたからです。その授賞式は感動的でした。帰国後、東京で慰労会を開催したときに聞いた授賞式の裏話は面白かったです。



ジョン・C・ブルークス氏は 40 年以上、一貫してテクニカルアナリストとして働き、米国のテクニカルアナリスト団体である MTA、7000 人以上が加盟する IFTA の共同創設者。テクニカル分析の学問的、社会的地位の向上にも尽力され、米国では多くの大学でテクニカル分析が正式科目として取り入れられるきっかけを作られた方です。日本でも将来は大学でテクニカル分析を教えるようになるのでしょうか？



日本ではテクニカル分析を使わない機関投資家が多いようですが、欧米ではファンダメンタル分析同様にテクニカル分析を重要視します。東京大会ではそのあたりをクローズアップ、動機付けできれば、ある意味で成功ではないかと思っています。

私が最初に IFTA 大会に参加したのは、2006 年のカナダ・バンクーバー大会でした。その時に体験した刺激や雰囲気が続いており、毎年の IFTA 大会への参加を湧きたてます。参加し始めたころは、毎年夏になると参加するか、しないかで迷う時期がありましたが、今は「行かなければいけない」とう意識に変わっています。

昨年のシンガポール大会終了後、IFTA 会長から IFTA 教育委員への参加を依頼されました。NTAA の先輩方に助けられながら四苦八苦していますが、それまではスカイプを通じてしか交流がなかった他の教育委員メンバー(エジプト、ドイツ、サンフランシスコ)に会うことができたことも、大きな成果だったような気がしています。



11 日の夜のガラ・ディナーでは、サンフランシスコ中心街にあるマイスターザール(添付写真)での豪華な夕食会。飲食は少し物足りないきがしましたが、簡単なイベントや次年開催のロンドン大会に引き継ぐ簡単なセレモニーはいつもながらに印象的でした。

今は東京大会をいかに成功させるかしか頭にはないですが、テクニカル分析の実践者として自分の世界を広げ、大きく成長したいと常日頃から思っています。2014 年はロンドン大会です。将来、IFTA 大会でのスピーカーを目指している人も、目指していない人も、世界のトップレベルのテクニカル分析の実践者・研究者が集結する IFTA 大会へ積極的に参加することをお勧めします。

以上